



特別レポート

北澤豪さん
環境問題を見つめる
in フィリピン

地元の子どもたちとマングローブの苗木を植える北澤さん。1950年代に約13,000ヘクタールあった西ネグロス州のマングローブ林は、500ヘクタールほどにまで減ってしまった

ごみ問題やマングローブ林の減少などの環境問題を抱えるフィリピン。今年2月、JICAオフィシャルサポーターの北澤豪さんが現地を訪れ、日本の支援の様子を視察した。

文=三田村麻季子 写真=久野真一(JICA広報室)



サッカー教室には30人の子どもたちが参加。ルールの徹底を繰り返し語る北澤さん



JICAは、ごみになったストローやジュースパックなどを活用して商品づくりも支援。ジュースのビニールパックを縫い合わせたかわいらしい帽子を見て、思わず北澤さんも試着

分別されないごみの現状を
目の当たりにして

フィリピンでは経済成長が進む一方で、貧富の格差や環境問題などの課題を依然として抱えている。中でも深刻なのがごみ問題。有害物質の発生を防ぐためにごみの焼却が法律で禁止されているフィリピンでは、ごみを処理せずに埋め立てているのが現状で、人々の健康にも影響が出ている。

首都マニラの南東にあるネグロス島サガイ市。今年2月、ここを訪れた北澤豪さんは、分別されぬまま投棄されたご

病気から人々を守る
日本人と出会う

一方、首都マニラ近郊でも、毎日100トン以上のごみが運び込まれるフィリピン最大のごみ山「バヤタス埋立処分場」を訪ねた北澤さん。ここバヤタスでは、周辺住民の多くがスカベンジャーとして一日中ごみ山を歩き回っている上に、貧困層であるため栄養状態も悪く、皮膚や気管支の疾患など健康被害が深刻だ。

そこで現在、周辺住民の保健衛生や生計の向上を支援するNPO法人アジア相互交流センター（ICAN）が診療所を運営し、医師による診察や病気を予防するための保健教育などを行っている。診療所を訪れる住民の多さに「この診療所がどれだけ住民の頼りとなっているのか」と北澤さんは感心した面持ちだった。

子どもと一緒に
マングローブを植樹

環境への負荷や人々の健康を考えると、ごみ山は閉鎖されるべき。一方でそれは、ごみを売って現金収入を得ている人々の生計手段を奪ってしまうことになりかねない。「環境問題と一口に言っても、さまざまな要素が絡み合っていて複雑化しており、幅広い取り組みが必要だ。まずは個人個人が、目の前にある自分ができることから取り組んでいくことが大切だし、そのために協力隊やNGOが草の根レベルで人々にできることを伝えていく活動はとても重要」と北澤さんは話した。

フィリピンの環境問題としてもう一つ象徴的なのが、マングローブ林の減少だ。ネグロス島では、かつて見渡す限りマングローブ林だった海岸部が、養殖池への転換、農地開墾、材木利用などの要因によって大規模に伐採されてきた。また、台風が発生地としても有名な島国フィリピンは、毎年のように甚大な被害を受けている。小魚などの産卵・育成場所としてはもちろん、台風から家を守る防波堤の役目も果たすマングローブ林の再生が急務となっていた。

北澤さんは、この地でマングローブ林の再生・保全活動に取り組むNGOイカオ・アコの活動現場を訪問。大きく成長したマングローブ林などを視察するとともに、地元の子どもたちと一緒にマングローブの苗木も体験した。「マングローブが成長し、魚たちのすみかになるほど大



金属やプラスチックなど現金化できるものを黙々と探すスカベンジャー。分別されず、あらゆる種類のごみが一緒に投棄されている事実。北澤さんは驚きを隠さない



面積は22ヘクタール、ビル5階の高さに相当するバヤタス埋立処分場。そのすさまじい規模に言葉が失う北澤さん

み山から金属やプラスチックなどを採し出し、それを換金することで生計を立てているスカベンジャーの姿を目の当たりにした。JICAはこれを改善するため、衛生面に配慮した埋立処分場を建設するための技術協力や廃棄物から堆肥を作る施設を建設。また、青年海外協力隊（環境教育）の山崎見生隊員が地域の学校を巡回し、ごみの適切な管理・処理3R※について教えている。

「自分にできることはなんだろう」

ごみの分別というルールすら守られていない現状を知った北澤さんは、スポーツを通じてルールの意味を伝えようと提案。地元の小学生を集めてサッカー教室を開催し、「スポーツではルールを守ることがとても大切。ごみの分別も同じこと。みんながルールをきちんと守ることが町もきれいになるよね」と最後に子どもたちに語り掛けた。

被災地の子どもにおもちゃをプレゼント!

4月3日、東日本大震災の避難所となっていた宮城県の東松島市立矢本第一中学校を北澤さんが訪れ、激励の言葉とともに500個余りのおもちゃと約200通の手紙を被災した子どもたちに手渡した。最大で約800人が避難生活を送っていた同校では、治安の悪化で西アフリカのニジェルから一時退避している青年海外協力隊が支援活動を行っていた。今回の大震災を受け、北澤さんが主宰するサッカースクールでは、スクール生の子どもたちからおもちゃを募集した。



©KTP Inc.

※ごみを「Reduce(減らす)」、「Reuse(再利用)」、「Recycle(再資源化)」の略。資源の再利用のキーワードとして使用される。